



Title	トゥルゲーネフの最後の愛
Author(s)	出, かず子; Ide, Kazuko
Citation	スラヴ研究, 27, 1-28
Issue Date	1981
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5110
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113089.pdf



トゥルゲーネフの最後の愛

出 か ず 子

Пускай скудеет в жилах кровь,
Но в сердце не скудеет нежность ...
О ты, последняя любовь!
Ты и блаженство и безнадежность.
Ф. Тютчев

本稿は、作家トゥルゲーネフの晩年における最後の愛、すなわち女優サーヴィナ¹⁾に対する愛に関して、その普通行なわれている伝記叙述の由来する原資料を探索すると共に、近年公開された新資料によって内容上の補足を試みようとするものである。

1

アンドレ・モーロワは彼の特意な伝記ものの一つ『トゥルゲーネフ伝』の中で、このロシアの作家の生涯の叙述を閉じるに当たり、死後 25 年ペテルブルクの科学アカデミーの大広間で開かれたトゥルゲーネフ博物館のことに触れて、ひとつの美しいエピソードを伝えている。「やがて博物館の番人たちは、トゥルゲーネフの肖像の前に新鮮なばらの花束が置かれて、一人の老婦人の手で毎日取りかえられるのに気づいた。それらのばらはマリヤ・ガブリーロヴナ・サーヴィナが運んでいたものであった。女友だちの美しい手によって置かれていたこれらの見事にもかよわな花ほどトゥルゲーネフの気に入ったであろう記念碑は考えられない²⁾。作家の死後 25 年、その時サーヴィナは 54 歳であった。確かに、このような死後の愛こそは、特に晩年のトゥルゲーネフの作品に表わされている、宗教的とさえいえる愛の観念にふさわしいものである。

ところで、文中の一老婦人サーヴィナについて、この逸話をモーロワはどこから借用したのであろうか。筆者にとってそれは長年の謎であった³⁾。諸著を探索するうちに、やがてこの逸話に限らず、サーヴィナについて、あるいはこの女性に対する作家の愛について、いくつかの伝記叙述の間に軽重の大きな違いのあることに気がついた。

例えば、わが国においては、最初のやや詳しい伝記といえる昇曙夢の『ツルゲーニェフ』(1914)には、その晩年の章の中で 1881 年作家の最後の故郷スパースコエ「帰省中に、親友なる詩人ポロンスキイ及び美術家サウインは家族を同伴して、ツルゲーニェフを訪問した⁴⁾という叙述がある。ここに「美術家サウイン」と記されているのは、女優サーヴィナ

1) Мария Гавриловна Савина (1854-1915).

2) A. Maurois, *Tourguéniev*, Paris, 1931, p. 184. アンドレ・モーロワ, 『ツルゲーネフ伝』大場幸男訳, 河出書房, 1941, pp. 174-175.

3) 拙文「トゥルゲーネフの墓」, 『えうゐ』, No. 7, 1979, p. 114 参照。

4) 昇曙夢, 『ツルゲーニェフ』, 実業之日本社, 1914, pp. 275-276.

の間違いであろうが、そのサーヴィナがいかなる人物であったかについては知る由もない。その後中山省三郎から最近のものに至るまで、間違おうにも言及されることが殆どなかった⁵⁾。わが国のものでサーヴィナのテーマを初めて取り上げた伝記は、恐らく佐藤清郎『ツルゲーネフの生涯』(筑摩書房, 1977)である。しかしこれは一般読者向けの著作であるために、叙述の典拠、考証の過程が明白でない⁶⁾。

わが国におけるこのような事情は、ことサーヴィナに関する限り、英仏の伝記においてもほぼ同様である。英国の古い作品研究であるエドワード・ガーネットの『トゥルゲーネフ研究』(1917)⁷⁾は、伝記に関しては、トゥルゲーネフ自身の長年の滞在国フランスのエミール・オーマンの研究(1906)に依拠しているが、このオーマンには、前記「美術家サウイン」が訪れた頃のスペースコエ村の叙述は詳しいが、そこへの招待・訪問客のうちにはサーヴィナの名は見当らない⁸⁾。ところが、20年代以降のヤルモリンスキー『トゥルゲーネフ』(1926)⁹⁾になると、明確に「不死鳥の愛」の章が設けられ、作家晩年のヴレフスカヤ男爵夫人に対する愛と並んで、女優サーヴィナとの最後の愛がまとめられており、以後そのテーマはマガルシャック『トゥルゲーネフ』(1954)¹⁰⁾に受け継がれ、ブーヅヴァル時代の作家の全生活の脈絡の中に折り込まれている。

このように見てくると、伝記におけるサーヴィナへの言及、あるいはサーヴィナに対する作家の愛の記述の違いは、ある程度、研究段階の時期の違いによるものと思われる。オーマンはトゥルゲーネフの死の翌年に刊行された作家の書簡集等¹¹⁾を利用することはできたであろうが、肝心のサーヴィナあての書簡を見ることができなかった。これが初めて公刊されたのは、サーヴィナの死後1918年のことであった。すなわち、作家トゥルゲーネフの生前の知己である法律家、名誉アカデミー会員 A. Ф. コーニがサーヴィナに先立たれた三番目の夫 A. E. モルチャーノフの協力を得て作家のサーヴィナあて書簡79通(電報も含む)を1918年に出版したのである¹²⁾。アメリカで研究を始めたヤルモリンスキーは、

5) 中山省三郎「ツルゲエネフの生涯と作品」『露西亜文学手帖』, 生活社, 1943。江竜龍太郎『ツルゲーネフ研究』, (理想社, 1968)は作品研究が本体であるせい、本文中には言及されていない。また巻末に付された年譜には誤解に導きやすい記載が見られる。例えば「1880年2—7月ロシアに帰る。若い女優サーヴィナ(1854-1915)と会う。」とあるが、前年の3月、すでに兩人の間には印象的な出会いがあったはずである。また「1881年7月、女優サーヴィナは病んでスペースコエ村のツルゲーネフのもとにしばらく客となる。」とあるが、少くとも身体上の病いでないことは確かである。その他のトゥルゲーネフに関する作品論の著作においてもサーヴィナについての言及は極めて少ない。

6) サーヴィナに関する限り、小椋公人『ツルゲーネフ、生涯と作品』(法政大学出版, 1980)の叙述は、佐藤氏のものに比較して極めて軽いものになっている。同上書, pp. 254, 256 参照。

7) E. Garnett, *Turgenev, a Study*, London, 1917.

8) É. Haumant, *Ivan Tourguénief, la vie et l'œuvre*, Paris, 1906, pp. 99-100. そこには、旧友グリゴローヴィチ, ラルストン, ポロンスキー家等々の名が挙げられている。

9) A. Yarmolinsky, *Turgenev, the Man, His Art and His Age*, N. Y., 1959 (1-st ed. 1926).

10) D. Magarshack, *Turgenev, a Life*, London, 1954, part 9: Bougival.

11) *Первое собрание писем И. С. Тургенева, 1840-1883 гг.* — Издание общества для пособия нуждающимся литераторам и ученым (“Литературного фонда”), Спб., 1884.

12) Письма И. С. Тургенева к М. Г. Савиной, *Тургенев и Савина*, с предисловием и под ред. почетного академика А. Ф. Кони, при ближайшем сотрудничестве А. Е. Молчанова, Петроград, 1918, стр. 3-60.

やがてこの資料を知り、その後彼自身、晩年のコーニと会ってもいる¹³⁾。このようにして以後この書簡資料は伝記に広く利用されることになる。

ところで、この書簡資料と関連のある他の関係資料の不足は、サーヴィナに対する作家の最後の愛についての伝記記述に不思議なほどの画一性をもたらしている。肝心のサーヴィナ自身のトゥルゲーネフあての手紙さえ知られていないのである。このようにして作家の最後の愛は、関連資料が極めて乏しいために、かえって想像を交えてさまざまな角度から叙述されるようになる。しかしそこに記載される事実には限りがあり、前記の書簡資料その他いくつかの原資料¹⁴⁾の範囲を出難いのである。本節の冒頭に掲げたモーロワの伝える花束の老婦人サーヴィナのエピソードにしても、その話の種は、実は、同時代人がサーヴィナから聞いたところを伝えた、ある伝聞資料中¹⁵⁾だけに見いだされるものなのである。

2

トゥルゲーネフの最後の愛に関する伝記研究ないしその叙述の歴史的経過がほぼ以上の如きものであるとするならば、(a) 従来いくつかの伝記に見られる共通事項、(b) それらと1918年資料(コーニ編)との関係、(c) その後のアカデミー版全集¹⁶⁾における関係資料の復元・増補のもつ意味、(d) さらに最近公刊の『未刊行書簡』¹⁷⁾による補完説明、これら4段階を順次踏んでいくのがごく自然な方法であろう。

ところで他方、トゥルゲーネフとサーヴィナとの関係は、事実上、大きく三つの時期に分けることができる。すなわち、I、1879年3月における二人の最初の出会い、この時期はまだ恋愛以前、あるいは少なくとも完全な恋愛感情の表現にまでは至らなかった時期である。II、翌1880年作家の比較的長い帰国の間(1月末から6月末まで)において、少なくともトゥルゲーネフ側の恋愛感情の表現が目立ち、ムツェンスク=オリョール間のメロドラマ的な同伴「小旅行」によって彼の感情が定着する時期。III、翌1881年7月におけるサーヴィナのスパースコエ滞在を頂天とする二人の関係の本格的ドラマ化の時期及びその

13) ソ連における伝記研究は、1918年の書簡資料公刊以後においても、クレマンを初め、最近のペトロフ(1968)、ナウモヴァ(1976)に至るまで、トゥルゲーネフ=サーヴィナ関係のクロノロジカルな経過については詳細に知りながらも概してこのテーマに関心が薄いように思われる。その理由に関しては今後の問題としたい。M. K. Клеман, *Иван Сергеевич Тургенев, Очерк жизни и творчества*, Л., 1936; С. М. Петров, *И. С. Тургенев, жизнь и творчество*, изд. 2-е, дополненное, М., 1968; Н. Н. Наумова, *Иван Сергеевич Тургенев, Биография писателя*, изд. 2-е, переработанное, Л., 1976. しかし、M. K. Клеман, *Летопись жизни и творчества И. С. Тургенева*, М.-Л., Academia, 1934 にはかなり詳しい年代的考証がなされている。ちなみにオリョール生まれのパリ在住ロシア人亡命作家 B. Зайцев の『トゥルゲーネフの生涯』には興味深いことにサーヴィナとの関係が主題的に取り上げられている。B. Зайцев, *Жизнь Тургенева*, Париж, 1932.

14) M. Г. Савина, *Мое знакомство с Тургеневым, Тургенев и Савина*, стр. 63-70.

15) В. Рышков, *Савина на тургеневской выставке, (Отрывки воспоминаний М. Г. Савиной об И. С. Тургеневе), Тургенев и Савина*, стр. 81-82.

16) И. С. Тургенев, *Полное собрание сочинений и писем в 28 томах*, Л., Наука, 1960-1968.

17) I. Tourguénev, *Nouvelle correspondance inédite*, t. I, ed. A. Zviguilsky, Paris, 1971.; I. Tourguénev, *Lettres inédites à Pauline Viardot et à sa famille*, ed. H. Granjard et A. Zviguilsky, Paris, 1972.

後。これら三つである。従ってこれら三つの時期の各々について前述の方法を順次適用してゆかなければならないであろう。

しかしその前に、そもそもサーヴィナとの出会いがトゥルゲーネフにとって一体どのような時期のものであったかについて、まず簡単に触れておこう。その出会いは、前年1878年の秋にあの『散文詩』のなかの「Ю. П. В. をしのんで」を執筆してからわずか半年後のことであった。周知のようにこの散文詩篇は、「廃虚と化したブルガリアの一寒村。急ごしらえの野戦病院に変わった納屋の軒下に、——」に始まり、「ほほえみは、ときとして涙よりもにがい」の名句を含み、「ねがわくは、優しき御魂よ、あえて御身の墓に捧げなす遅ればせのこの花を、深くとがめたもうな。」¹⁸⁾の願いで結ばれているものである。そこには、1877年露土戦争の勃発によっていまひとたびの逢瀬を永遠に失った敬虔な男爵夫人ヴレフスカヤに対する作家の誠実な愛の切々たる思い出が秘められている。愛するその夫人は志願看護婦として従軍し、1878年1月24日チフスのため異国の戦場で病死した。そしてその約半年後の9月に作家は上記の一篇を執筆したのだった。「Ю. П. В.」とは、いうまでもなくヴレフスカヤ夫人のことである。このヴレフスカヤ夫人が修道女の敬虔さを体現した知的女性であったとするならば、彼女の死の約1年後に作家が会うことになる女優サーヴィナは、それとは対照的にボヘミアンの多情を十分にもち合わせた感性的な女性であった。

3

まず普通行なわれている叙述の共通事項を三つの時期に分けてまとめておこう。

I (a) 二人の関係は、1879年初めサーヴィナがペテルブルクのアレクサンドリンスキー劇場で¹⁸⁾の自分の祝儀興行のためにトゥルゲーネフの『村のひと月』を取り上げ自らは養女ヴェーロチカの役を演じようと思い立ち脚本の切りつめの許しを得るために、1月10日パリのトゥルゲーネフに電報でそのことを問い合わせ、これに対して直ちに作家が同意の返電をしたところから始まる。上演は作家の危惧に反して大成功を収めた。2月8日他の所用が主で帰国したトゥルゲーネフは、親友トポロフの仲介でサーヴィナをホテルに招き、初めて会うことになる。61歳に近い作家は、25歳の若い女優を「祖父のように」暖く迎え、かつ彼女の黒い大きな瞳に印象づけられた。翌3月15日トゥルゲーネフは劇場に招かれて彼女の演技を見る。お忍びのつもりが観客に気づかれ、嵐のような拍手喝采を浴びてしまう。翌16日、作家は女優サーヴィナを訪ね、文学基金助成の集りで彼女と二人で「田舎女」の一場面を朗読し、ここでも拍手喝采を浴びる。しかし作家は同月21日には再びパリへ向かって出発している¹⁹⁾。

この最初の出会いの時期におけるトゥルゲーネフに関して、マガルシャックは「まるで

18) Тургенев, *Соч.* XIII, стр. 167, ツルゲーネフ, 『散文詩』神西・池田訳(岩波文庫), pp. 91-92.

18²⁾ ブリチェットは「モスクワで」としているが、これは間違いである。V. S. Pritchett, *The Gentle Barbarian*, London, 1977, p. 233.

19) Cf. Magarshack, *op. cit.*, p. 290; Yarmolinsky, *op. cit.*, p. 375; モーロワ, 上掲書 p. 149-51; 佐藤清郎, 本文中上掲書, p. 230-231. ザイツェフにはこの時期についての記述は全くない。

生まれ変わったかのようになってパリに帰った²⁰⁾と記し、ヤルモリンスキーは同年10月27日付の作家の手紙から「半ば父親のような、半ばそれ以外のやさしい感情」ということばを引いて「彼女の演技に対する彼の熱中……は、もう一つの感情と入り交じった」と述べている²¹⁾。

II (a) 1880年1月末ペテルブルクに帰国したトゥルゲーネフは、4月中旬まで同地にとどまり、約2週間のモスクワ滞在ののち、5月をスペースコエに過ごした。冬のペテルブルク滞在中には、痛風に悩まされながらも作家はサーヴィナと彼の部屋あるいは劇場で折り繁く会い、3月30日のサーヴィナの誕生日には「И. С. トゥルゲーネフより М. Г. サーヴィナへ」と刻ませた純金のプレスレットまで贈っている。伝記が共通にひく愛の告白の手紙(4月24日付モスクワから)には、「私の生涯において、あなたは私がもはや決して別れられない、何かそのような人になった」とあり、更にその3日後の手紙には、「始終あなたのことを考えています……あなたを愛しています」と書かれている。他方サーヴィナは、マガルシャックによれば「彼女よりもはるかに年上の俳優であった最初の夫とすでに離婚し、ある富裕な騎兵隊将校と婚約し、同時に美男の一将軍とも恋仲であったが、高齢にして有名な作家トゥルゲーネフの鍾愛にも少なからず喜ばされたもののように想像される²²⁾。

その夏サーヴィナにはオデッサへの巡業の旅があった。その途次、5月16日、トゥルゲーネフは車中のサーヴィナをスペースコエに近いムツェンスク駅に出迎え²³⁾、オリョール駅までの50キロ近くを彼女に伴って1時間余り同乗するというメロドラマティックな事件が起きる。その車中、彼女のコンパートメントの中で白髪、白髭の老作家は年がいもなく「20歳の青年のように」なり、他方しかしそれが「ランプの焰の最後のゆらめき」であることを悲しくも痛感した。オリョールでただひとり下車し、そこから淋しくスペースコエに戻ったトゥルゲーネフは、その後の数日の間に数通の長い手紙を彼女に書き送っている。それらは、ムツェンスク=オリョール間同伴の「小旅行」の熱い思い出と、オリョール駅で車輛から彼女を危く連れ去らんばかりであったその包まれた心情を切々と吐露したものであった。それら数通のうち、最もよく知られているものに、「いま12時半です。——1時間半前にここに帰ってきました……」に始まる5月17日付の手紙と、「このような手紙は、これが最後です」で結ばれている5月19日付の手紙がある²⁴⁾。後者の書簡中の「何か秘密のすばらしいものがその後ろに見えるような気がする、半ば開きかけたあの扉は永遠に閉じてしまった²⁵⁾という表現は極めて印象的である。

20) Magarshack, *op. cit.*, p. 290; Pritchett, *op. cit.*, p. 235.

21) Yarmolinsky, *op. cit.*, p. 375. またモーロワは、「それは彼を若がえらせ、彼に再び元気を与えていた」と記している。モーロワ, 上掲書, p. 151. なお、佐藤清郎, 上掲書には「恋愛とも友情ともつかぬ関係」とある。p. 231.

22) Magarshack, *op. cit.*, p. 293.

23) マガルシャックはこの時間を午後10時としている。

24) 5月17日付手紙については、モーロワ, 上掲書, pp. 152-153, 5月19日付手紙については、Зайцев, *указ. кн.*, стр. 240-241, Magarshack, *op. cit.*, pp. 294-295, Yarmolinsky, *op. cit.*, p. 376, 佐藤清郎, 上掲書, p. 233 に本体部分のかなり詳しい紹介がある。

25) Тургенев, *Письма XII/2*, стр. 261. Cf. Yarmolinsky, *op. cit.*, p. 376.

他方オリョールで作家を後にしたサーヴィナについてザイツェフは、「恐らく彼女は、ムツェンスク=オリョール間の1時間半気晴らしをし、彼をもてあそんだのかもしれない。彼女自身の心は別のこと、すなわち彼女の未来の夫ニキータ・フセボロシスキーのことでいっぱいだった」²⁶⁾と述べている。しかし劇団内の不和からサーヴィナはオデッサを立ち去りたい、さもなければ海に飛び込みたいというようなことを言っている事実をトポロフを介して知ったトゥルゲーネフは、さっそく「あのすばらしい手をあなたは魚の餌にやっってしまうおつもりですか」となじり、かつは女優として生きるよう励ましている²⁷⁾。

ところで、サーヴィナの予告にもかかわらずトゥルゲーネフが信じていなかった彼女のパリ訪問が、同1880年7、8月に実現する。しかしその時サーヴィナは未来の夫フセボロシスキーと一緒に、トゥルゲーネフとの再会は他人行儀のものに終り、やがて作家は一友人に「私にとって彼女はもはや存在することを止めた」と書き送っている²⁸⁾。

III (a) 翌1881年はサーヴィナのスパースコエ滞在によって二人の関係が再燃したばかりでなく、本格的にドラマ化した年である。この年の4月29日ペテルブルク到着で帰国したトゥルゲーネフは、5月25日から約1週間モスクワに滞在し、ポロンスキー家の家族²⁹⁾と共に同月31日スパースコエへ発ち、以後8月21日までスパースコエに滞在した。これが作家の最後の帰国、最後の故郷滞在となった。パリ出発以前サーヴィナから「健康についての悪い知らせ」を受け取っていたトゥルゲーネフは、彼女に夏のスパースコエ滞在を勧め(3月1、3日付手紙)、それに対して彼女は滞在することを約束している³⁰⁾。モスクワから一緒に発つことはできなかったが、スパースコエに先発したトゥルゲーネフは彼女を迎えるべく、のちに「サーヴィナの間」と呼びならわされることになる彼女のための特別の部屋をはじめとして、万端の用意を整えた³¹⁾。サーヴィナのスパースコエ滞在は、7月14日から18日までの4泊5日³²⁾、いよいよ実現することとなった。それは、生涯の愛人ポーリーヌ・ヴィアルドーさえ行なったことのなかった作家の最愛の土地での滞在であった。

サーヴィナ滞在中の彼ほど陽気なトゥルゲーネフを見たことはない、とポロンスキーは

26) Зайцев, указ. кн., стр. 241.

27) 1880年5月27、28日付サーヴィナあて手紙。佐藤清郎, 上掲書, p. 238 参照。

28) ここに一友人とはトポロフである。Тургенев, Письма XII/2, стр. 297. Cf. Yarmolinsky, *op. cit.*, p. 376; Зайцев, указ. кн. стр. 241-242.

29) 小さな子供連れの滞在中、滞在中にはきのこ狩りをした、とマガルシャックは書いている。Cf. Magarshack, *op. cit.*, p. 299.

30) 1881年3月25日付サーヴィナあて手紙参照。

31) 1881年6月14日付サーヴィナあて手紙参照。M. シチェプキンはその回想の中で次のように述べている。「マリヤ・ガヴリーロヴナ・サーヴィナがスパースコエのトゥルゲーネフの所に客になりに行くことをトゥルゲーネフに知らせた時、イヴァン・セルゲーエヴィチは見違える程になった。……『ペテルブルクから自分の所にやってくる有名な女優マリヤ・ガヴリーロヴナ・サーヴィナを待っています。彼女はその才能の点でラッセルとのみ比較することができます。ラッセル以後その演技によって彼女ほど強烈な印象を私に与えた者はいない』と云った」。Тургенев в записях современников, Л., 1929, стр. 369-370.

32) ヤルモリンスキーはサーヴィナのスパースコエ滞在を7日間としている。Yarmolinsky, *op. cit.* p. 376.

伝えている³³⁾。気候も彼女の訪れと共に好天が続いた。16日正餐の時には、夏の雷雨が見舞ったと伝えられている。複郁たる夕方の庭のバルコニーで、作家は若き女優の生い立ちと舞台生活の「告白」を聞き、また作家自ら書き終えたばかりの「勝ち誇れる愛の歌」を客人たちに朗読して聞かせたりした。更に一夜サーヴィナだけを書斎に招き入れて肘掛椅子に坐らせ「今まで誰にも読んで聞かせなかった」、そして「焼き捨てるつもり」だと作家が語ったという「散文詩」の一篇をしみじみと読んで聞かせた。それは生涯の愛人ヴィアルドーにあてたもので、「私の花をみな摘み取った御身、だのに御身は私の墓を訪れもすまい」という空しい一句が彼女の記憶に残った。またある深夜、朝まだきに「夜の声」を聞かないか、という主人の誘いで散策に出、作家が鳴き声で何鳥かを聞き分けて皆を驚かせたこともあった。日中は特別の設備のしつらえられた、後日「サーヴィナの池」と呼ばれた庭内の池でサーヴィナは毎日水泳を楽しんだという³⁴⁾。サーヴィナ滞在中トゥルゲーネフにとって最も感激的な幸福な思い出は、17日のポロンスキー夫妻結婚記念日を祝うためにバルコニーで行なわれた正餐の時、シャンパンの後でサーヴィナから与えられた「焼きつくすような、燃える接吻」の印象であった。その日作家は村の農奴の男女約70人を招いて祭りを催し、女優も作家も踊りに巻き込まれた³⁵⁾。

18日スペースコエを去ったのち、7月29日付ペルミ県シヴァのフセボロシスキーの領地からの手紙で、サーヴィナは婚約した旨の報せを作家に書き送った。実際に結婚したのは一年も後の1882年7月4日のことであった³⁶⁾。

1881年8月28日に故国を離れたトゥルゲーネフは、もはや再びロシアの土を踏むことはなかった。しかし、二人の文通は1883年作家の死に至るまで途絶えることはなく³⁷⁾、また舞台の上のサーヴィナを見る機会は失われたが、パリでの最後の逢瀬の機会はあった(1882年4月1日から3日まで毎日)。そればかりでない。病苦に悩まされながらも作家はスペースコエでのサーヴィナとの再会の夢に最後まですがりついている。この度のサーヴィナのパリ滞在中、トゥルゲーネフは病気の彼女に知己の医者を紹介し、またサーヴィナは作家の住居を訪れてポーリーヌ・ヴィアルドーとも会っている³⁸⁾。サーヴィナの最後の見舞いの直後、トゥルゲーネフはやがて1年半後彼を死に導いた脊柱骨髄炎の徴候と思わ

33) Cf. Yarmolinsky, *op. cit.*, p. 376.

34) その夏は大変暑い夏で、池のそばに特別のあずまやを建てて水泳した、とマガルシャックは記している。Cf. Magarshack, *op. cit.*, p. 299.

35) Cf. Yarmolinsky, *op. cit.*, pp. 376-377; Magarshack, *op. cit.*, pp. 299-301; Зайцев, *указ. кн.*, стр. 242-244; モーロワ, 上掲書, pp. 153-154; 佐藤清郎, 上掲書, pp. 238-239. それぞれによって取り上げる事項の選択はさまざまである。

36) См. Тургенев, *Письма*, XIII/1, стр. 562.

37) かずかずの手紙のうち、よく引用されるものに1881年10月18日付の次の手紙がある。「次のような図を思い描いてごらん下さい。10月のヴェネツィヤ、あるいはローマです。旅行着を着た二人の外国人が道を歩いて行きます。あるいはゴンドラに乗っています。一人は背が高く、ぶかっこうで白髪の足の長い男ですが非常に満足しています。もう一人はすばらしい黒眼に同じく黒髪のスマートな婦人ですが……彼女も満足していると仮定しましょう。彼らは画廊や教会などを訪れ、晚餐を共にし、夜には二人で劇場に行きます。そしてそこで……そこで私の空想はうやうやしく止まります。……それは何かを隠さなければならないからでしょうか……あるいはかくすべきものは何もないからでしょうか?」。Cf. Magarshack, *op. cit.*, p. 305; Yarmolinsky, *op. cit.*, p. 377. モーロワ, 上掲書, p. 154.

38) 佐藤清郎, 上掲書, p. 240 参照。

れる狭心症に見舞われた。同年6月シヴァのサーヴィナからの手紙に接した時、作家にとってそれは「濁った小川に浮くばらの花びら」のようなものとしか言いようがなく、もはやばら色の未来ではなしに自分の棺桶を見るだけの、あの『貴族の巢』の中の年老いたレンムに自らをたとえている³⁹⁾。しかし1883年2月10日付サーヴィナあての最後の手紙もまた依然として「私は自分の愛着を変えることはありません。——最後まであなたに対して同じ感情をもち続けるでしょう」と結ばれている⁴⁰⁾。

4

I (b) 1879年の出会いに関する1918年資料は、サーヴィナ自身の自筆覚え書き⁴¹⁾、ベリャーエフの伝聞資料「村のひと月、M. Г. サーヴィナの回想から」⁴²⁾及び同年のトゥルゲーネフのサーヴィナあて書簡⁴³⁾の三つ、これらが主なものである。その中でも、第1の自筆覚え書き「И. С. トゥルゲーネフとの出会い」は文字通り79年の出会いに関する詳細な記録以外の何ものでもない。一般にサーヴィナのトゥルゲーネフあて書簡が失われている現状では、サーヴィナ側の証言として極めて大きな価値をもつものであり、前述 I (a) の叙述事項もすべてこれに含まれている。従って、直接この資料に立戻って補足するならば、ほぼ以下の通りである。

まず、サーヴィナにとってのトゥルゲーネフは、「たえず外国に住んでいるので、わが演劇界の現状を全く知らず、若い時のオストロフスキーの記憶しかなく」⁴⁴⁾、アレクサンドリンスキー劇場の一座についても、かつてヴィアルドー夫人のレッスンを受けたアバリノーヴァ（『村のひと月』でナタリアを演じた）以外には自分を含めて何も知らない一老作家であった⁴⁵⁾。従って、二人の交際は、『村のひと月』の原作者として脇役のヴェーロチカを自ら書きながらもそれをどう演じてよいか分からないトゥルゲーネフと、そこにこそ女優としての演技のやり甲斐を感じていた⁴⁶⁾サーヴィナとの出会いから始まる。トゥルゲーネフのペテルブルク到着の数日後、作家の代理で A. B. トポロフがやって来て、ヨーロッパ・ホテル滞在のトゥルゲーネフがサーヴィナの来訪を望んでいる旨告げた時、彼女は「そんなことはあり得ない」と当惑しながらも翌日の訪問を約束し、翌日も躊躇と不安のうちに作家を訪ねている。実際に会って初めて温かい親しみやすさから作家「トゥルゲー

39) 1882年6月7日付サーヴィナあて手紙。Cf. Yarmolinsky, *op. cit.*, p. 378; モーロワ, 上掲書, pp. 169-170 参照。

40) Cf. Yarmolinsky, *op. cit.*, p. 378.

41) М. Г. Савина, Мое знакомство с Тургеневым, *Тургенев и Савина*, стр. 63-70. (以下引用は著者名とページ数のみ記す)。

42) Ю. Д. Беляев, Месяц в деревне, (Из воспоминаний М. Г. Савиной), *Тургенев и Савина*, стр. 73-77. (以下引用は著者名とページ数のみ記す)。

43) Письма И. С. Тургенева к М. Г. Савиной (1879-1883 гг.), *Тургенев и Савина*, стр. 3-60. (以下この書簡集から引用する場合は *T. и C.* と略記する)。

44) Савина, 69.

45) Савина, 64.

46) 最初の出会いの日にサーヴィナは、「ポリシンツォーフ〔『村のひと月』に登場する隣村の地主〕の役でのヴァルラーモフがいかに偉大であるか」をトゥルゲーネフに示し、演技によってヴェーロチカを「創造」した喜びを語っている。См. Савина, 64.

ネフ」の前にいる畏怖の念を忘れて15分程話し込み、大きな興奮のうちにヴェーロチカ役の自分を見てくれるよう招待してしまった。トゥルゲーネフにとっての初印象のサーヴィナは「才女」だったらしいが、それに対して、日頃「可愛い女」としか言われつけていなかったサーヴィナは狼狽気味である⁴⁷⁾。

うかつに招待はしたものの劇場はすでに満席で、サーヴィナは帝国劇場ディレクター、キスチェル男爵に直訴するという異常な手段に訴えてやっと上演間際にディレクター・ボックスの切符を作家に贈ることができた⁴⁸⁾。サーヴィナは「心臓の止まる思いで夜を待ち……おごそかに演じた」⁴⁹⁾。ナターリアの役をこなしきれなかったアバリノーヴァに対して17歳のヴェーロチカに成り切ったサーヴィナの演技は、原作者の描写をはるかに越えるものがあり、作家を驚かせた。

翌日トポロフの前触れでサーヴィナは「胸をときめかせて」トゥルゲーネフの来訪を待ちうけた。しかしやって来たトゥルゲーネフは、ただ「好奇心」をもって彼女に接するだけで、ロシアの女優サーヴィナを有名なフランスの女優デクレの無邪気な猿まねとだけ見ているような風があった⁵⁰⁾。「民族感情を刺激された」サーヴィナは、持前の激情性をもって「彼の西欧主義に反対し、ロシア芸術擁護のモノローグを喋りまくってしまった」。安楽椅子の背にもたれて坐っていたトゥルゲーネフは力なく両手を拡げるゼスチュアをしなければならなかった⁵¹⁾。

同日の晩催された文学基金助成のための夜会はトゥルゲーネフの帰国の機会を利用して、彼とドストエフスキーとの参加のもとに特に興味あるプログラムが生まれ、サーヴィナも朗読のために招かれていた。朗読に「田舎女」を選んだのはサーヴィナで、トポロフの示唆によるものであった。トゥルゲーネフは初めからサーヴィナとの共演におじけづき、舞台上に上るやすぐにあがってしまい、呆然と立ちつくしてサーヴィナをはらはらさせた⁵²⁾。終って楽屋に帰った時サーヴィナに語ったというドストエフスキーの次の評言が伝えられている。「あなたの一語一語はとぎすまされていますね。まるで象牙細工のように。がお年寄りの方は何やらシューシュー言っていましたね」⁵³⁾。そのドストエフスキー自身の方はといえば、トゥルゲーネフへのあてつけのために、ひいきの婦人⁵⁴⁾の娘から大きなバラの花束をもたされて「滑稽であった」⁵⁵⁾。

47) См. Савина, 64.

48) См. Савина, 65.

49) Савина, 65.

50) См. Савина, 66.

51) См. Савина, 66-67. 日頃からヴィアルド夫人を快く思わず何とかしてトゥルゲーネフを母国ロシアに引き戻そうとしていた同席者トポロフは、サーヴィナのロシア芸術擁護に内心強く共感した。ちなみに、「村のひと月」の著作権はトポロフ夫人に贈られており、サーヴィナによる毎年の上演の印税は、夫妻の養女「トゥルゲーネフのリュエパ」ことイヴァーノヴァの養育に役立った (См. Савина, 67.)。

52) См. Савина, 68.

53) Савина, 69.

54) Анна Павловна Философова のことで、この婦人は当時トゥルゲーネフと仲違いしていた См. Д. В. Философов, Запоздалый венок. (Отрывки воспоминаний М. Г. Савиной об Тургеневе), *Тургенев и Савина*, стр. 80.

55) 別の慈善コンサートの際のドストエフスキーのすばらしい朗読についてサーヴィナは「このもろくて虚弱な身体はどこからこのような威力、音の力が出てくるのか。『人々の心をことばで燃やせ』——いまでも聞こえてくるようだ」と語っている。Савина, 69.

ところで、ベリヤーエフの伝聞証拠によれば、『村のひと月』の上演は何か「文学的なもの」を取り上げたいというサーヴィナの発案によるもので、乗り気でない劇団員に対する説得によって1月17日ペテルブルクでは初めての上演にこぎつけたものであった⁵⁶⁾。それだけにトゥルゲーネフのこの戯曲の上演は、その後10年間彼女と切り離しがたいものになり、1903年8月26日オリョールで開催されたトゥルゲーネフ記念・文学・音楽の夕べに参加した時にも彼女が朗読に取り上げたのだった。その時彼女は「回想はほとぼしり出てこの20年間は無かったかのようだ」と語っている⁵⁷⁾。

1879年10月27日サーヴィナあての作家の手紙で、彼女から送付依頼のあった彼の写真を急いで彼女あてに送る旨伝えているが、ルイソフの伝聞資料によれば、1909年のトゥルゲーネフ博覧会の開催に際してサーヴィナは「これは私の誇りです」と称して二枚の写真を示したという⁵⁸⁾。

1879年3月21日パリに向けてペテルブルクを出立後同年10月27日までの間、トゥルゲーネフのサーヴィナあての手紙は残されていない。トポロフを介してサーヴィナが自分の写真を欲しがっていることを聞いて喜んで書いた手紙の中に初めて「半ば父親のような、半ばそれ以外のやさしい感情」⁵⁹⁾ということばが見いだされる。そしてまたもや翌年2月まで手紙は途絶えてしまう。パリ出立後二人の間に「規則正しい文通が始まった」というサーヴィナの回想は、時期に関する記憶の間違いであろう⁶⁰⁾。

以上のように見てくると、1879年二人の出会いの年に関する限り二人の間には友情、尊敬、感嘆以上の感情があったと判断できる証拠は何一つない⁶⁰⁾。マガルシャックのいうように「生まれ変わったかのようになってパリに帰った」のは、サーヴィナとのことによるよりも、むしろ帰国中ロシアの学者、知識人、学生、婦人たちから予期せぬ熱烈な大歓迎を受けたことによるものであろう。

II (b) 次に1880年の作家帰国中の交際に関しては、「ふたりの間にエロースの神の働きのあったことは否定しようもあるまい」⁶¹⁾と想像されるにもかかわらず、1918年の関係原資料は作家の側からの書簡だけであって、不思議なことにサーヴィナ自身の残した記録、彼女からの伝聞記録中には何一つ見当たらない。彼女は自筆覚え書きの予定項目の一つに「P. A. ポチューヒナ同伴オデッサ行き途中オリョール通過」の一件を挙げているが⁶²⁾、こ

56) См. Беляев, 75.

57) Беляев, 75. スパースコエでトゥルゲーネフはサーヴィナに、作中ナターリアのモデルとなった一女性のポートレートを見せ、「ラキーチン、それは私です。私はいつも自分のロマンの中で自分を成功しない恋人役として描いています」と語ったという。См. Беляев, 77.

58) Рышков, 81.

59) 1879年10月27日付手紙。T. и С., 4. 本稿 p. 21 参照。

60) サーヴィナは他所でも例えば1879年の文学基金助成の集りの共同朗読を1880年としている。См. Программа продолжения “воспоминаний” М. Г. Савиной об И. С. Тургеневе, *Тургенев и Савина*, стр. 71. ヤルモリンスキーも1879年11月から翌年の帰国までの間にサーヴィナあての愛情の手紙が多数残されていると書いている。Cf. Yarmolinsky, *op. cit.*, 375.

60²) Гранжарльは、この時期に限らず全時期を通じて、サーヴィナは老作家の愛の告白にひそかな喜びを感じながらもまじめに悩むことはなかったといっている。H. Granjard, *Ivan Tourguénev et les courants politiques et sociaux de son temps*, Paris, 1966, p. 453.

61) 佐藤清郎, 上掲書, p. 233.

62) T. и С., 71.

れは書かれずじまいになった。それ故、1880年はサーヴィナ側の事情が最も謎に包まれている時期である。

前記 II (a) の叙述も殆どすべて1918年公刊のトゥルゲーネフの書簡集によるものである。同書簡集によって補足を試みるならば次の通りである。

同年1月28日ペテルブルクに到着したトゥルゲーネフは、2月1日付の手紙⁶³⁾で「1時間前に着きました。お会いできれば大変嬉しい」とさっそく書き送り、だが足の痛風の発作に悩まされているいらいちを伝えている。以後2月15日まで少なくとも7通の手紙が残されている。「いつ来て下さるのか知らせてほしい」、「次のデートまで忘れないで下さい」、「明日お会いできれば嬉しい」、「今度のあなたの役をぜひ見たい」。痛風で外出もむずかしいのに劇場の切符を頼んだりしている。このようなやるせなさのなかで前述のプレスレットが贈られたのだった。7通のなかには第三者には事の仔細がわかりかねる手紙もある⁶⁴⁾。

4月中旬モスクワへ発ったトゥルゲーネフは、他人の手前、駅での見送りを自分から断ったのにモスクワに着くやもうペテルブルクの最大の思い出として「あなた」を挙げ、オデッサへの巡業の途中「私の村、それはムツェンスクから10露里ですが、そこへ1日お招きしたい」旨、あるいは少なくともムツェンスクからオリョールまでの間「お送り」したい旨、書き送り、クールスク鉄道のモスクワ発の汽車の時刻表まで克明に記している⁶⁵⁾。同じ日に二度も手紙を書く程の夢見ようであった。5月スペースコエに移ってから同地の「花盛り」の模様を伝え「一台か二台の四輪馬車で」自宅に伴うことを夢見ている。しかし5月5日付の手紙には「あなたの筆跡を長いこと見ていない」旨が記され、サーヴィナ側がどのような状態にいたかをわずかながら推察させる⁶⁶⁾。ともかくこのようにして同月16日のムツェンスク=オリョール間の同伴「小旅行」が実現したのであった。巡業のためサーヴィナがオデッサに行ったのち、同月22日皇后マリヤ・アレクサンドロヴナの死去の知らせを知るやトゥルゲーネフは、さっそく24日に上演の一時中止もあり得ることと考え繰り返しスペースコエへの招待の電報をオデッサあてに打っている⁶⁷⁾。

その後未来の夫を伴ったサーヴィナとのパリでの再会と別離に関しては、1880年11月1日付の手紙が作家の心境をよく表わしている。「パリでの私達の最後のデートの別れに、あなたが私の手をにぎってくれたとはいえ、私は非常によく分かったのです。これが——もしちょっとした仲違いでないとしても別離だということを。——……あなたは私に手紙を下さるとお約束なさいました。しかしもちろん、こんなことばを口になさってもあなた

63) *T. u C.*, 4. Tourguénev, *Nouvelle correspondance inédite*, t. I, pp. 229-230, n. 8 参照。

ここではこの手紙を1881年5月1日付のものと推定している。

64) 「愛するマリヤ・ガヴリーロヴナ、医者が私に明晩の外出を許してくれたことをあなたにお知らせすることが必要と思います。それで最近私どもの間でいろいろな外交的な『ていねいさやあいまいさ』が出ていますので——私はあなたに友達として別れを告げたいのです。——で、あなたは今晚私の所にお茶にお寄りになりませんか？ 私たちはもとの通りに、仲よく話し合えるでしょう。——そしてそこで今度の冬まで、あるいは来年までお別れすることになるでしょう。返事の一行でも下さい」(1880年4月16日付)。*T. u C.*, 8.

65) 1880年4月24日付, 5月5日付, 5月12日付手紙参照。*T. u C.*, 9-10, 12, 13.

66) 1880年5月12日付手紙参照。*T. u C.*, 13.

67) *T. u C.*, 16.

ご自身そのことを本気でそう考えてはいらっしゃらない。……ご近況を、あなたのご健康を——まもなくご結婚なさるのかどうかを——私にお知らせ下さいませんか？ これは皆私にとって非常に関心があります。……ペテルブルクにはおそらく今年末に参ります。——しかし私達はお会いしたのかどうか——さもなくば劇場で拝顔したのかどうか——これが問題ですね？ いずれにしても私達は以前のようにではなくお会いすることになるでしょう⁶⁸⁾。それにもかかわらず、サーヴィナが作家の次の帰国の予定を問い合わせるなど、彼女側からも時に手紙を出していることが、作家の手紙から知られるのである⁶⁹⁾。

以上のように見てくるとき、1880年のサーヴィナのパリ滞在後「私にとって彼女はもはや存在することを止めた」としたトゥルゲーネフの心境がそれ程決定的なものではなく、サーヴィナの再婚を近い将来に予想して、別の形の、しかし引き続く愛着の念をもち続けていたことには変りなかったことが分かる。他方サーヴィナ側も、作家との交際を、ザイツェフのいうような単なる一時的な「気晴らし」⁷⁰⁾とは考えていなかったことが分かる。

III (b) サーヴィナのスパースコエ滞在の年、すなわち「スパースコエ 81年」に関してサーヴィナ自身が思い出として列挙している事項は次のような項目である。すなわち「オリョールでの出会い、ムツェンスクへの行程、菩提樹、ザハールとゼルテル水、池、『夜の声』、ポロンスキー夫妻結婚記念日のミサ、村の祭、イワン・セルゲーエヴィチのスピーチ、森への散歩、息子のことを泣く隣人についての物語、肖像、『眠り椅子』、告白」⁷¹⁾。これらのうち、「夜の声」、「告白」についての概略は前記 III (a) で見た通りである。それらの基づく 1918 年資料は、ベリヤーエフ、フィロソーホフの伝聞資料及びバジレフスキーあてのサーヴィナの手紙の中に見いだされる⁷²⁾。

これらのうちサーヴィナ自身の書いたバジレフスキーあての手紙は、彼女のスパースコエ滞在の思い出を記した唯一のものである。「昨今私はなぜかスパースコエのイヴァン・セルゲーエヴィチの所での私の滞在のちょっとした詳細を思い出します。太陽、暖かさについてあなたの手紙で読んだ時、私は更にはっきりとすべてが念頭に浮かびました。あそこは、驚嘆すべき菩提樹のある何とすばらしい庭でしょう。或る時夜の 2 時に食事のあと、彼は『誰か夜の声⁷³⁾』を聞きたくはないかね？』とたずねました。私はもちろん最初に賛成しました。イヴァン・セルゲーエヴィチと腕を組んで歩いていったにもかかわらず、暗さ

68) *T. u C.*, 19.

69) 1880 年 11 月 25 日付手紙。 *T. u C.*, 20.

70) 本稿 p. 6 参照。

71) Савина, Программа продолжения “воспоминаний” М. Г. Савиной об И. С. Тургеневе. (Черновой набросок), *Тургенев и Савина*, стр. 72.

72) 「夜の声」および告白については本稿 p. 7 参照。

Д. В. Философов, *Запоздалый венок*, *T. u C.*, 78-80. ベリヤーエフに関しては注 42) 参照。

73) フィロソーホフは、サーヴィナの回想を次のように記している。「私は言いました。『庭へ行きましょう。』彼は喜んで出て行きました。私達は長い間夜明けまでぶらつきました。鳥が目覚め始めた時、彼はそれぞれの名前を私に教えてくれました。彼は声でそれらを識別しました。鳥たちのうちの鳥が一番早く目が覚め、どのように鳴くかを予言しました。すばらしかったです。そして彼は私にどんなに感謝したことか。』」Философов, 79.

と知らない場所のせいか少しびくびくしました。ああ、それは何と絶妙な音楽『夜の声』よ。草、茂み、それぞれが歌っているように思われました」⁷⁴⁾。

「告白」に関しては、ベリャーエフの比較的詳しい伝聞資料の記述がある。「暑い日中のあと涼しくなった時トゥルゲーネフは自分の部屋からバルコニーに出て自分の女客に言った。——ではどうか告白して下さい。それは彼らの間で『告白する』と名づけられたのだった。サーヴィナは実際、この時ごくまじめであった。時折告白は夜まで続いた。眼を半ば閉じ、いつまでも絶えず微笑を浮かべてトゥルゲーネフは、彼の前で告白しているロシアの女優の物語を聞いていた。彼女は暗い庭の蔭から三日月が空に出たのに気づかなかった。そして池から湿気がただよい、もうずっと前に部屋に、シューシューいつているサモワールのところへ戻る時刻だった……」⁷⁵⁾。トゥルゲーネフは、サーヴィナのこの「告白」の生き生きした語り口⁷⁶⁾にいたく感嘆して、それをそのまま書けば「すばらしい文体になる」と言って彼女に金ぶちの青い手帳を贈った。天性の女優として自分自身を演ずることはできて書くことが苦手であったサーヴィナは、その手帳をすぐには埋めることができず、作家の死後はるかのちになって初めて彼との思い出を書き記したのだった⁷⁷⁾。

上記 III (a) の叙述中のその他のいくつかの事項、すなわち、「サーヴィナの間」、「勝ち誇れる愛の歌」の朗読、焼きすてられた「散文詩」、泳いだ池、「燃える接吻」に関する普通の伝記叙述のもとになっている 1918 年資料は、ベリャーエフ、フィロソーホフ、ルイシコフによる伝聞資料及びトゥルゲーネフの書簡である。

まず「サーヴィナの間」について言えば、サーヴィナがたち去ったのちトゥルゲーネフは彼女の滞在の 5 日間を思い出し、その間に「あなたを親しく知り、あなたのすべての長所、短所を知りました。なればこそいっそう強い愛着を感じました」と書き送り、彼女の逗留した部屋を「永遠にサーヴィナの間として残す」ことを誓っている⁷⁸⁾。

次に「勝ち誇れる愛の歌」の朗読について言えば、作家の朗読ののち感想を求められてポロンスキーが「よくない、印刷しない方がいいだろう」と卒直に忠告したのでトゥルゲーネフは落胆し、サーヴィナが「女性の直観」によってことばでは慰めきれぬことを感じ作家を庭に連れ出したことが語られている⁷⁹⁾。

焼きすてられた「散文詩」については、サーヴィナがベリャーエフに語った回想しか基づくべき資料がない。それは作家と女優との二人の間だけで行なわれた事柄であって、『散文詩』の手稿手帳の中から「決して印刷しない」一篇を取り出して、トゥルゲーネフがサーヴィナに「ごらんなさい、これは散文でさえない、本当の詩で『彼女に』という題なのです」と語ったという⁸⁰⁾。

74) 1895 年 1 月 29 日付バジレフスキーあてサーヴィナの手紙。T. u C., 97.

75) Беляев, 73.

76) フィロソーホフは「マリヤ・ガヴリーロヴナのような才能ある俳優たちは物語るのではなく、『演ずる』のである。それぞれの人物が『描写される』。マリヤ・ガヴリーロヴナは憶えていただけでなく見ていた。われわれもまた見るように望んだ」と記している。Философов, 78.

77) См. Беляев, 74.

78) 1881 年 7 月 22 日付手紙。T. u C., 26. ちなみに間取りについてのシチェブキンの記録もある。(Там же.)

79) См. Философов, 79.

80) См. Беляев, 74.

サーヴィナの泳いだ池については、彼女の思い出に関するルイシコフの伝聞資料中に次の記録がある。「あのね、——マリヤ・ガヴリーロヴナは続けた。——もしも私の心が特にも悲しくなったならば、もしも美しい過去についての思い出にふける必要が起こった時、私はいつも、ほら、この絵の前に佇むのです。これはスペースコエ・ルトヴィーノヴォの池です。これを画いたのは Я. П. ポロンスキーです。どれほどすばらしい思い出がこの場所とつながっていることか。トッルゲーネフとポロンスキーが自分たちの手でそこに板で脱衣所のようなものを作ったことを想像して下さい。なぜなら、Ж. А. ポロンスカヤと私は、そうでなければ水浴びすることを遠慮したからです」⁸¹⁾。

最後に「燃える接吻」については、事の性質上当然のことかもしれないが、トッルゲーネフの残した資料しかない。サーヴィナの婚約の知らせ(7月29日付)を受け取った8月10日付返信⁸²⁾の中で作家は、かつてサーヴィナの「出発の前夜に起ったこと」を回想し、それは「テラスで食事の時、シャンパンのあとでのこと。それを忘れるのは更にづらい。私はあえて辛うじてこのことを思い出させるのです」と述べ、翌9月下旬の手紙⁸³⁾でも再び彼の「心をときめかせた……あの輝く燃えるような接吻」のことをサーヴィナに思い出させている。

以上のほか、夏の雷雨、ポロンスキー夫妻結婚記念日、村の祭りに関して言えば、それら叙述の基づく資料はポロンスキーの回想記録にある⁸⁴⁾。なおこの回想記録は、これら三つの項目に尽きるものではなく、他のいくつかの事項⁸⁵⁾に関して上述の伝文資料と記述が一致している。

更に、1918年資料のうちには、1882年パリ滞在中のサーヴィナが作家を見舞ってヴィアルドー夫人とも会った時のことに関して、フィロソーホフの伝聞記録中に興味ある次の記述がある。トッルゲーネフは「もうほとんど死にかかっている。パリで。部屋は階上。それほど広くはないし天井も低い。階下には——ヴィアルドーの家族が住んでいる。退屈な音階、急奏が聞こえてくる。ヴィアルドー夫人が歌のレッスンをしている。誰かがドアをノックする。老人ヴィアルドーが自分の友人を見舞いに入ってくる。廃人も同然だ。サーヴィナは立ち上がる。……私はこの恐ろしい印象を決して忘れられない。わがトッルゲーネフ、わが誇りがこのように投げすてられているのです、ひとりぼっちで。」⁸⁶⁾。

以上のように見てくる時、トッルゲーネフとサーヴィナとの親密な関係がまさに頂天に達する彼女の「スペースコエ滞在」のドラマに関する原資料は比較的量の限られたものであって、そこから普通行なわれている伝記叙述の画一性が結果してきているように思われる。その意味では1918年資料の編纂者の一人コーニの『トッルゲーネフとサーヴィナ』の序文は、このテーマに関する伝記叙述のオリジナル版とも言うべきものになっている⁸⁷⁾。

81) Рышков, 81.

82) *T. и С.*, 30.

83) 1881年9月23日付手紙 *T. и С.*, 31.

84) Я. П. Полонский, И. С. Тургенев у себя в его последний приезд на родину (Из воспоминаний), *Нива*, 1884, №. 1-8. なおこの回想記録は1918年資料に部分的に再収録されている。

85) 「勝ち誇れる愛の歌」の朗読、泳いだ池。

86) Философов, 78. なお1882年5月30日付ポロンスキーあてトッルゲーネフの手紙参照。 *T. и С.*, 88.

87) Кони, Предисловие к сб. *Тургенев и Савина*, pp. V-XXXVIII. モーロワは、はっきりとコ

トゥルゲーネフの最後の愛

補遺。——まだ30歳足らずのサーヴィナがフセボロシスキーと再婚して一年余り経つか経たないうちに、1883年8月22日作家トゥルゲーネフは死んだ。その死に際してのサーヴィナ、及びその後三番目の夫モルチャーノフと結婚したサーヴィナの、トゥルゲーネフとの関わりについては伝記にあまり叙述されていない。これに関する資料を伝える意味もあって、以下1918年資料のうちから関係部分を、冗長な引用をできるだけ抑制しつつ、次にまとめておこう。

さて、作家の訃報が届いた時、サーヴィナは折り悪しく首都ペテルブルクを離れていた。首都に帰って来た彼女は、さっそくコーニに次のような手紙を書いた。「喜びのためではなく、ペテルブルクに帰ってきました。アナトーリー・フォードロヴィチ！⁸⁸⁾ このことはずっと以前から予期していた——とまわりでは言っています。私も予期はしていました。しかし、そうではあっても信じられません。信じたくないし、信じることができません。私にはなぜか彼が死にに帰ってくるように——正に死にに——自分の家で、必ずスパースコエで、彼の愛するスパースコエでもう一度彼に会えるように思われたのです……私はそう期待していたましたそう信じていました……私はいま何もできません。泣きもしません。私は自分の悲しみを何によっても表現することができないのです……今日一晩中は——彼の生涯の最後の四年間の——貴重な手紙を読み返しました。……これからパニヒダに参ります。私は彼が信じていなかったお方に祈りを捧げるでしょう。私はいままで親愛な人、縁者を失ったことがありませんでした。祈りで慰めの感情を経験したことはありませんでした。私はいま何を祈ってよいのか想像さえできません。……ひとの好奇心に富んだ眼なごし、月並みな話題、そして恐らくは同情さえもが、彼についてのこのようなことが、なぜ私にはすべて侮辱的に思われるのでしょうか？……」⁸⁹⁾。

翌30日には同じコーニにあてて「誰にも会わないように朝早く修道院でミサを終えました。やっと泣き始めることができました」⁹⁰⁾と書き、数日後の9月5日には二人で「親愛なイワン・セルゲーエヴィチについてお話ししましょう」⁹⁰⁾と誘い、同月10日カザン寺院に行った時の模様を、その翌日次のように伝えている。「……昨日私はカザン寺院に行きました。もちろん泣かないわけにはゆきませんでした。群集のかげに、暗いすみでボールをまわって立っていたので誰も私に気づかなかったとはいえ、それにもかかわらず、誰かにとっては私の興奮について新聞で知らせる必要があったのです。これは私の舞台活動の限度を超えた事柄であるように思えます。果たして俳優は常にどこでも公衆に従属しているものなのでしょうか?! 葬儀には行くまいと決心しました。自分の涙を惜しんだからではなく、私にいつわりの嫌疑をかけ始め、そのことによって親愛なる故人の思い出を侮辱する機縁を与えないようにするためでした。私は彼に別れを告げる方法を考え出しました。そのためにはあらゆる不可能なことさえいたすつもりです。」⁹¹⁾。しかし、コーニ

コーニの原典に拠っていると書いている。モーロワ、上掲書、p. 156. なお Cf. Yarmolinsky, *op. cit.*, p. IX. しかしヤルモリンスキーの文献ノート、マガルジャックの文献表にも不思議なことにコーニ編『トゥルゲーネフとサーヴィナ』は挙げられていない。

88) 1883年8月29日付コーニあてサーヴィナの手紙。T. u C., 91.

89) T. u C., 91.

90) T. u C., 92.

91) 1883年9月11日付コーニあてサーヴィナの手紙。T. u C., 92.

の伝えるところによれば、サーヴィナは葬儀に出席し、だが墓前での平凡な追悼演説が始まるや立ち去ったのだった⁹²⁾。そしてその翌日の追悼の夕べには「故人の遺言を含んでいるともいえる」『ファースト』の最後の章を感動的に朗読した⁹³⁾。

やがて、当然のことながらサーヴィナは故トゥルゲーネフの書簡集の出版企画の問題に巻き込まれる。彼女は、1879年から作家の死に至るまでトゥルゲーネフから受取った個人的な愛の手紙を、コーニに渡した1通を除いて、すべて大切に保管し、公刊すべきものとは考えなかった。しかし彼女のそうした態度を「共有財産」の隠匿として非難する向きもあった。彼女はいたく悩まされコーニの助言を求めた⁹⁴⁾。渡してもらった1通についてのコーニの意見は「未公刊『散文詩』の一つ」と見做せる⁹⁵⁾、というものであったが、サーヴィナはコーニに渡した1通をも返却してもらい⁹⁶⁾彼女の死に至るまですべてを手許に保存し深く「隠匿」する方を選んだ。作家の死後25周年の年にも彼女は作家の愛の手紙を展覧することを固く断わっている⁹⁷⁾。

死後25周年にはヴォルコヴォ墓地で追悼会が催され、作家を記念する博覧会がペテルブルクの科学アカデミー・大ホールで開催された。墓地では彼女は司祭プチャータの祈禱に出席し、あまり面白くない演説を途中まで聞いて退出した⁹⁸⁾。博覧会の方には手紙こそ出品しなかったが、ただ観覧しただけでなくその準備のために協力を惜しまなかった⁹⁹⁾。特に、スペースコエのトゥルゲーネフの邸内の部屋の再現の計画には「有頂天になって」参加した。ある博覧会関係者はその時の模様を次のように伝えている。「すべての物がオリョールから届けられた時、私はこのことをマリヤ・ガヴリーロヴナに知らせた。彼女はすぐにわれわれの中に姿を現わした。興奮して家具を配置し、これら彼女にとって愛するものの中で全くの幸福を享受した。おお、愛する『眠り椅子』よ、——有名なトゥルゲーネフのディヴァンを見て、彼女はこう叫んだ」¹⁰⁰⁾。本稿の冒頭部分に引用した博覧会場トゥルゲーネフの肖像の前に不滅の作家をしのぶ思い出として毎日供えられたばらの花束についても「サーヴィナが送ってきていた」という記述がある¹⁰¹⁾。

しかしそれにしても、作家の死後これほどまでに生前の彼との交際を貴重な思い出としたサーヴィナが、かつて作家から贈られた金ぶちの青い手帳に回想を書き続けなかったのは誠に残念なことである。1915年の春の一夜、メレジュコフスキー、ギッピウスと一緒に彼女の「演ずる」かのような生き生きとした思い出話を聞いたフィロソーホフが彼女に「回想録を書いたらよいのに」とすすめたのに対して、白夜別れしなに答えたサーヴィナのことばには余韻がある。「どうして、どうして、書くことはできませんわ。口述ならばともかく、でも私の中のどこかにもう記されていますわ。コーカサスに行って……それか

92) Кони, XXXVII.

93) Кони, XXXVIII.

94) 1884年11月18日, 1885年6月15日付コーニあてサーヴィナの手紙。T. u C., 93-94.

95) 1885年7月29日付サーヴィナあてコーニの手紙。T. u C., 94.

96) 1899年日付なしのコーニあてサーヴィナの手紙。T. u C., 98.

97) Рышков, 81. 1908年3月23日付コーニあてサーヴィナの手紙参照。T. u C., 99.

98) 1908年8月22日付モルチャーノフあてサーヴィナの手紙参照。T. u C., 100.

99) 1909年3月20日付バジレフスキーあてサーヴィナの手紙参照。T. u C., 101.

100) Рышков, 82.

101) Рышков, 82, См. Кони, XXXVIII. なお本稿 pp. 1, 3 参照。

ら村へ。そこで回想にかかりきりましよう」¹⁰²⁾。それから数カ月ののち1915年9月8日サーヴィナもこの世を去った。

5

以上によって、普通伝記に行なわれている叙述と1918年資料との関係はほぼ明らかになった。それは作家トゥルゲーネフと女優サーヴィナとの親密な関係の内容に関して、いくつかの増補と慎重な訂正とを要求するものであった¹⁰³⁾。しかしながら、作家の死後における上述のサーヴィナの手紙に見られるように、二人の間の愛情の内容がなんら「嫌疑」に値しないものであったか否かについてはいま一つはっきりしないものがある。

さきにも触れたように、肝心のトゥルゲーネフあてのサーヴィナの手紙は行方が全く知られていない。それらは作家の死後、文書に関する遺言執行人に指定されていたアンネンコフにポーリース・ヴィアルドーから渡された文書の中にすでに無かった模様である¹⁰⁴⁾。従って、1879年以後数年間の愛情関係におけるサーヴィナ側からの表現は、さきにも触れたように1918年資料中のトゥルゲーネフの書簡から間接的に知られるだけである。

ところで、サーヴィナの手許に「隠匿」されていた彼女あての作家の手紙が彼女の死後、生前の知己コーニと夫モルチャーノフの手によって出版の運びになった時、大部分は原文に忠実に行なわれたが、いくつかの手紙については削除と訂正が加えられたのだった¹⁰⁵⁾。これらはアカデミー版全集によって一段と忠実に復元されている¹⁰⁶⁾。数に関しては、サーヴィナあて電報を除く書簡全77通中9通にすぎないが、二人の親密な関係の機微に触れる個所なので、以下三つの時期に応じて検討しておこう。

I (c) 1879年『村のひと月』上演の年に関しては、もともと3通の書簡しかない時期なので、特記すべきこともない。

II (c) 1880年ムツェンスク=オリョール間の同伴「小旅行」の年に関しては、全部で27通の書簡が知られているが、そのうちの3通に訂正、増補がある。6月4日付書簡に関しては、手書きの誤読訂正と思われる些細な個所¹⁰⁷⁾と削除部分「あなたは門を閉じられたのですか、それとも開けられたのですか」¹⁰⁸⁾という暗示的な句の増補があり、他の二つはし

102) *Философов*, 80.

103) 本稿 pp. 10, 12 参照。

104) Cf. L. Schapiro, *Turgenev, His Life and Times*, Oxford Univ. Press, 1978, p. 329. Кони, VII, XXX.

105) シャピーロは「サーヴィナの評判をおもんばかっていたの重大な削除」と言っているが、これらの削除・訂正の意図と重要さは一義的でない。Schapiro, *op. cit.*, p. 296.

106) 例えば、1879年1月10日あるいは11日付サーヴィナあてトゥルゲーネフの電報はオリジナルは保存されておらず、1918年資料中の「サーヴィナの回想」に基づいて全集版では復元されている。また同月19日付フランス語電報は、1918年資料中では、サーヴィナによるフランス語からのロシア語訳の記憶として引用されているのみで、書簡集には収録されていないが、全集版ではオリジナルに基づいて復元されている。

107) 1918年資料では「No. 97」となっているところを、全集版では「M-r J. T. <ourguéneff>」と訂正されている。

108) *Тургенев, Письма*, XII/2, стр. 269.

ばしば引用される「小旅行」直後の比較的長い書簡(5月17日付, 5月19日付)¹⁰⁹⁾に関するものである。

5月16日オリョール駅でサーヴィナを見送ったトゥルゲーネフは、その夜をオリョールで過ごし翌日昼前にスペースコエに戻り、さっそくペンを取った。もし彼のひとり合点の計画が実現していたとしたらサーヴィナもその日一日そこに滞在するはずであった。「まるで注文したように、天国のようです。空には雲一つなく——風もなく暖い……もしもあなたがここにいらしたなら私たちはテラスに坐り、景色に見とれ……絶えずあなたの小さな足にキスしたことでしょう」。こんな空想が浮かび手紙に書き付けるのだった。作家はサーヴィナの外国旅行の予定をそれ程信じていなかったが、パリ来訪の折には自分に出す手紙を局止め郵便にするよう細かい指示まで与えている。——ここまでは1918年書簡資料でも読める。

ところで削除された部分は次の三個所である。(1)「しかしこれだけはお約束して下さい。もし門が閉じられたままでなければならぬのなら、お手紙なんかいただきたくはない……さもないと神話で御存知の、あのタンタロスの焦燥の苦しみにになりますから。もう何も申しません。」¹¹⁰⁾ (2)そして手紙を結ぶに当たって、「あなたの手に、足に、あなたがキスを許して下さるところすべてに……私はキスします」という個所で、「許して下さいらないところにさえ」の句が削除されている¹¹¹⁾。(3)更に追伸の中で、「あなた以外の誰もこの手紙を読まないでしょうね?」が削除されている¹¹²⁾。

その翌々5月19日付の手紙でもトゥルゲーネフは、三日続きの「うっとりするような天気」の中でなおもサーヴィナがそこに滞在したであろう1日のことを夢想しつづけている。(1)「それは何という幸福であり得たことだろう。」という、この1918年資料の表現は、実は「どんな夜を私たちは過ごしたことだろう……それから何が起こっただろう。神のみぞ知る。」¹¹³⁾が原文なのであった。(2)ついで作家は1時間余りの「小旅行」中「20歳の青年」のように感じた自分の中の「ランプの焰の最後のゆらめき」を追想し、自分の中に引き起こされた事態を想像する。1918年資料によれば、その個所は「それは結合への、自分自身をすっかり捧げ切ることへの抑えがたい欲望でした。そこではすべての地上のものが何か細い焰の中で消え失せるのです。」¹¹⁴⁾であったが、もともとの原文は「結合への、占有への、自分自身を捧げることへの抑えがたい欲望でした。そこでは感覚さえもが何か細い焰の中で消え失せるのです。」¹¹⁵⁾であった。(3)そして最後に、作家はそのすべてのもの、感覚さえもが消え失せる「あのすばらしい瞬間」¹¹⁶⁾が永久に失われてしまうのは残念だと記しているが、この個所の原文は「あのすばらしい夜」¹¹⁷⁾であった。そして手

109) 本稿 p. 5, 脚注 24) 参照。

110) Тургенев, *Письма*, XII/2, стр. 259.

111) Там же.

112) Там же.

113) Там же, стр. 260.

114) Т. и С., 15.

115) Тургенев, *Письма*, XII/2, стр. 261.

116) Т. и С., 15.

117) Тургенев, *Письма*, XII/2, стр. 261.

紙の末尾の部分のうち 1918 年資料では「門はかけられた」¹¹⁸⁾の句が削除されている。

III (c) 1881 年、サーヴィナのスパースコエ滞在が実現した年及びそれ以後に関しては、47 通残されているが、そのうち 6 通に削除部分の増補が見られる。

(1) まず第 1 は、1881 年 3 月 1 日トゥルゲーネフがサーヴィナからの手紙を受取り、夏のスパースコエ滞在を誘う手紙¹¹⁹⁾の中に見られるものであって、これはサーヴィナの手紙に言及しているものとして重要である。大括弧中が削除の復元増補部分である（以下同じ）。——「あなたはお手紙の末尾できつくキスします、とおっしゃっていますね。〔どのようにですか。あの 6 月の夜に、鉄道の手車の中で、どのようにですか。あの何度ものキスを私は——百年生きながらえても——忘れはしません。あれこそがきつくということの意味だとあえて考えます。〕愛するマリヤ・ガヴリーロヴナ、とても愛しています」¹²⁰⁾。

(2) サーヴィナのスパースコエ滞在后 1 カ月足らずのうちにトゥルゲーネフは 7 月 29 日付サーヴィナからの手紙で、彼女がフセボロシスキーとの結婚の道を選んだことを知らされたが、恐らくその後の手紙で少くともしばらくの間は——同年末までは——その結婚が実現しがたいことを第二の手紙で知った。「スパースコエ滞在」の思い出と未来に対する変らぬ「心からの深い友情」の誓いでいっぱいのお手紙は、8 月 19 日付スパースコエでサーヴィナあてに認める。——「いつ、どこであなたとお会いすることになるのでしょうか。その時あなたは何になっておいででしょうか。フセボロシスカヤ夫人にでしょうか。あなたの第 1 の手紙からはそのように考えられました。〔しかし第 2 の手紙からは、今年のあなたのロマンスが消え去ってしまったことだけははっきりしています……それがとても嬉しい。——今年は〕……」¹²¹⁾

(3) その後サーヴィナからの音信不通に、かえってスパースコエでの「輝く燃えるようなキス」の思い出をかきたてられていた¹²²⁾トゥルゲーネフは、10 月になって受け取った彼女からの手紙に心はずませて、10 月 18 日付ブージュヴァルからの比較的長い手紙を書く。この手紙は、二人でお忍びでイタリア旅行をしゴンドラに乗り、画廊や教会をめぐる、オペラを見物する楽しい夢想を描いたものとして時に引用される手紙である¹²³⁾。ここで問題の箇所は、その結びにある。——「〔(本当に誰もこの手紙を見ないのでしょね?)〕あなたの可愛い顔を両手で抱いて——あなたの唇に、いきいきとした、そのすばらしいばらの花にキスします。その花が私の接吻の下で燃え〔そしてかすかに震え〕るのを想像しています。〔これは想像でしょうか……それとも思い出でしょうか?……〕あなたのイワン・トゥルゲーネフ。』」¹²⁴⁾

(4) やがて同年 12 月 3 日付パリからの手紙で再びサーヴィナからの音信不通にいらだち、「そばにいないのにキスなどしたくない」と言いながらも翌 82 年春のペテルブルクに

118) Там же.

119) 1881 年 3 月 3 日付パリからの手紙。

120) Тургенев, Письма, XIII/1, стр. 72.

121) Там же же, стр. 110.

122) 1881 年 9 月 23 日付ブージュヴァルからの手紙。Тургенев, Письма, XIII/1, 136-137.

123) 本稿注 37) 参照。

124) Тургенев, Письма, XIII/1, стр. 137.

おける再会を確信しながら、——「やはりあなたの両手にキスしたくなるでしょう……〔両手だけでなく〕……」¹²⁵⁾と書いている。

(5) 翌1882年4月末不治の病のためもはやスペースコエには帰れぬと断念した後のトゥルゲーネフは、6月7日付ブージュヴァルからの手紙で、3月末のパリでのサーヴィナとこの世の最後の再会と別離を回想し、別れの際の彼女の堅い握手の意味を考える力さえ失った自分を嘆きながら、すでに再婚していた彼女にあてて秘めた愛の心情を記す。——「手紙でこうしてあなたとだけ話し合っているものと存じているのですが、〔しかし他人の手があなたに無断でこの手紙に触れないとも限りませんね〕……」¹²⁶⁾。

(6) 最後に、1882年9月17日付ブージュヴァルからの手紙で、作家はサーヴィナからの手紙なしにはもはや生きることも耐えがたいといい、やっと届いた彼女からの音信に心から慰められ更めて切ない愛情の告白を繰り返す。——「私があなたをととてもとても愛していることは御存知でしょう。ごきげんよう。あなたの〔すべて〕にキスします。〔『すべてに?』——あなたはたずねるでしょう。『そう、すべてに』——と私は繰り返すでしょう。〕……」¹²⁷⁾。

トゥルゲーネフのサーヴィナあて書簡資料に関して、アカデミー版全集において復元・増補された個所はほぼ以上の通りである。なかにはムツェンスク=オリョール間の「小旅行」の車中におけるあつい「何度ものキス」のように新事実を教えてくれるものもあるが、多くは作家の表現の仕方にかかわるものであって今更とりたてて整理するまでもないであろう。これらの復元・増補のもつ意味は何であろうか。この問題に関心をもつシャピーロは、かつて「削除された部分はトゥルゲーネフがその若い女性を愛していたという今までの見解を更に強めるものであるが、二人が恋人同志であったことをなんら示すものではない。トゥルゲーネフが1879年まで性愛の能力があったということすら確実でない。」¹²⁸⁾と言っている。彼によれば、「上記増補部分に繰り返し表われている「悶」ということばは一つの遠回しの表現で、「恐らくは愛情の肉体的燃焼に対する何らかの抵抗ないし障害を表わす」¹²⁹⁾ものである。かつての削除部分が愛情問題の機微に触れるものであるだけに、性愛の親密さの程度に実証の関心が向けられたのも無理からぬことであろう。

ところで、1918年にコーニがトゥルゲーネフのサーヴィナあて書簡集を出版するに当たって原文にできるだけ忠実であろうとしながらも結局若干の削除をよしとしたのも、正に読者が性愛の程度にのみ関心を奪われることを怖れたからであった。1918年8月に出されたと思われるコーニのモルチャーノフあての手紙によれば¹³⁰⁾、さまざまな醜聞や邪推の種にされたこの書簡には「何とやさしい芳香が漂っていることか」、しかし邪心の持主たちによって心を歪められた読者大衆は「大作家の魂の最後の燃焼」を正しく感じとることが

125) Там же, стр. 156.

126) Там же, стр. 278.

127) Тургенев, Письма, XIII/2, стр. 44.

128) Scharigo, *op. cit.*, p. 296.

129) *Ibid.*, p. 299.

130) Г. В. Степанова, К истории издания сборника «Тургенев и Савина», Тургеневский сборник, III, Л., Наука, 1967, стр. 274.

できず、「自分の月並な俗な見方からキスの『再検討』を始めることだろう。……」という危惧の念が表わされている。この危惧の念にもかかわらず、コーニは初めすべてをありのままに印刷に附そうと望んだが、最終段階で前述の若干の削除・訂正が施されたのだった¹³¹⁾。シャピーロは、それら「若干の重大な削除」を「サーヴィナの名譽を守るため」のものとしているが¹³²⁾、これは誤解に導く解釈である。

上述の経路から分かるように、トゥルゲーネフとサーヴィナとの親密な関係に関するコーニの評言——これは前述の通りその後一般に行なわれている伝記叙述のオリジナル版である¹³³⁾——は、1918年資料中の削除部分をも十二分に踏まえたものであることが分かる。彼のまとめによれば、——

I (c) 1879年の最初の出会からサーヴィナは「ただ優雅な女性としてだけでなく、敏感な芸術家として」強い印象を作家に与え、それ以来最期の年に至るまで作家にとって「サーヴィナは恐らくヴィアルドーよりも少なからず輝かしい価値をもっていた」¹³⁴⁾。この評言は文字通りといってもよい程そのままモーロワに受け継がれているものである¹³⁵⁾。コーニはそれに加えて「トゥルゲーネフの彼女への愛着は完全な根拠をもって愛と呼びうる」と言っているが、前述のようにこれは1879年に関する限り資料の裏づけが薄弱であるように思われる。

II (c) 1880年の「小旅行」の直後に書かれたトゥルゲーネフの比較的長い手紙に関してコーニは「サーヴィナによって惹き起こされた感情の力の前でのためらい、そして静かな悲哀と情熱のこもったやさしさに貫ぬかれている」¹³⁶⁾と言っている。この評言もまたモーロワによって巧みな比喩を用いて受け継がれている¹³⁷⁾。門によって閉ざされた扉の前に立つ老トゥルゲーネフの、躊躇の消えた安堵感と悲哀における慰めの側面が見落されていない。

III (c) 1881年「スペースコエ滞在」中のあの作家が繰り返し思い出す「輝く燃えるようなキス」のことをコーニが知らないわけではない。しかし総じてこの時期に特徴的なのは「サーヴィナの外面的すばらしさへの感嘆の調子と並んで、秘めたる悲嘆と自分自身へのアイロニーの調子が響いている」¹³⁸⁾ことである。コーニはそれをひと言で「友情の名におおわれた愛のやさしさ」¹³⁹⁾と呼んでいる。資料に即してうなずける見解である。

ところでコーニは、その頃トゥルゲーネフがポーリーヌをはじめヴィアルドー家の人びとにあてて書いた手紙を知る由もなかった。これらの『未刊行書簡』を吟味すること、少くとも関連資料を整えること、それが次節の課題である。

131) *Там же.*, стр. 275-276.

132) Scharigo, *op. cit.*, p. 296.

133) 本稿 p. 14 参照。

134) *Кони*, XXVI.

135) モーロワ, 上掲書, pp. 150-151 参照。

136) *Кони*, XXVII.

137) モーロワ, 上掲書, p. 149 参照。

138) *Кони*, XXX.

139) *Кони*, XXIX.

6

さて、トゥルゲーネフがサーヴィナと初めて会ったのは1879年のことであったとしても、彼が舞台の上の彼女を見たのはそれが初めてではなかった。それに先立つこと5年、1874年に作家はすでにデビュー当時の魅力溢れる新人女優サーヴィナを見たことがあった¹³⁹⁾。その時の印象をトゥルゲーネフは終生の愛人「親愛なるポーリーヌ・ヴィアルドー」にあてて次のように書き送っている。「昨日ホテルのまずい正餐後、ロシアの劇場で三本観ましたが、二つはいまわしいばかりのもの、一つは出来のよくないものでした。その出来のよくない方に……サーヴィナ嬢という新人女優が出ていました。大した才能で、姿かたちも可愛らしく賢こそうですが、顔つきが卑しく、声のひどさは鼻をふくらませたロシアの小間使いそっくりです」¹⁴⁰⁾。このように描かれている女優サーヴィナの存在は、その時にはまだ、ポーリーヌ・ヴィアルドー夫人との関係において何ものをも意味しなかった。それが、やがて1879年以降彼女に対してトゥルゲーネフの愛情が芽生え表面化してきた時、同夫人及び彼女の娘クロードの嫌悪、非難の対象になるのである。

1880年近くにもなれば、すでに40年近くもの年月を経てきたヴィアルドー夫人との関係はいわば骨董化していたが、しかしそれだけに風雪に耐えた重みには否定しがたいものがあった。また、生まれた時のことから知っている、夫人の娘クロードも30歳近くになろうとしていた。ひとりサーヴィナの場合に限らず一般にトゥルゲーネフにおける対女性関係、あるいは恋愛について語る場合には、いずれの場合にもその背景としてポーリーヌ・ヴィアルドーとの関係あるいはヴィアルドー夫妻との持続的な「三人の共同生活」——「マリアージュ・ア・トゥロワ」——を顧慮する必要のあることは言うまでもないであろう。それは1843年、25歳のトゥルゲーネフがまだドイツ留学から帰ったばかりの頃、22歳のポーリーヌがペテルブルクに来演した時から終始続いていた、いわば第二の自然状態ともいえる常態であったからである。1880年にはトゥルゲーネフはすでに62歳、夫のルイは80歳、ポーリーヌは59歳になっていた。それまでの長い間に相継いで起こった、ラムベルト伯爵夫人、オリガ・トゥルゲーネヴァ、マリヤ・トルスターヤ、ヴレフスカヤ男爵夫人等々に対するトゥルゲーネフの多情な愛情関係も、ポーリーヌとの関係を変えることはなかった。時にはヴィアルドー一家における三人のそのような異常な常態を打ち切ることができたという希望が頭をもたげることにはなかったが、時に起こるそのような不幸な感情さえもが常態に伴なうごく自然な一構成要素になっていた。1877年4月7日付ポロンスキーあての手紙の中でトゥルゲーネフは自分の日記のある個所を引いて伝えている。「3月5日、真夜中、再び机に向かう。階下では私の哀れな友達が完全にひび割れた声で何やら歌っている。私の心は真っ暗な闇夜より暗い。墓が大急ぎで私を飲み込んでし

139) プリチュェットは1872年の『村のひと月』の初めての上演にサーヴィナが出たとしているが、これはその年が『村のひと月』のモスクワにおける初めての上演の年に当たることに起因する誤りであろう。Cf. Pritchett, *op. cit.*, p. 229. ロシア演劇史上のサーヴィナについては、M. Slonim, *Russian Theater*, London, 1963, p. 68, 92, 『村のひと月』上演については、スタニスラフスキー『芸術におけるわが生涯』(蔵原惟人訳)、岩波文庫(下) pp. 66-78を参照。

140) I. Tourguénev, *Nouvelle correspondance inédite*, t. I, p. 292. (以下 Tourguénev, *N. C. I.* と略記する)。

もうようだ。昼間は空しくあてもなく味気なく、またたくまに過ぎてゆく。なんと、またベッドにつく時がやってくる。私は生きる意志もなければその権利もない。もはやなすべきこと、期待すべきこともないし何かやりたいということもない」。ついで作家はポーリースに言及し、「あなたはポーリースがもはや歌えないばかりか、かつて『予言者』においてフィデスを創り出した歌姫が劇場のオープニングの切符さえ送られなくなってしまっていることを忘れていた。劇場が送らないのも無理はない。もうずっと前から彼女から期待できるものは何もないのだから……ポーリースと僕は正に一对の古瓶同然なのだ」¹⁴¹⁾。これを書いた時トゥルゲーネフは、その年の初め『処女地』がロシアで冷やかに迎えられたこともあって落胆の底に沈んでいたことも事実であるが、それにしても当時のポーリースに対するトゥルゲーネフの暗い気持がよく表われている。

I (d) やがて1879年トゥルゲーネフと食事を共にしたコーニがその時作家の語った告白として記しているところによれば、トゥルゲーネフは「君には分からないことだろうが、止むなく他人の巢のふちに身を寄せ、まるで慈悲のような親切を受け取り、ただ慣れと哀れみだけから追い出されないでいる老犬のような生き方をしなければならぬ時、老人の暮しがどれほど淋しく退屈なものか君には想像できまい」と語ったという¹⁴²⁾。このような心境にあった時、トゥルゲーネフは若きロシアの女優サーヴィナと相まみえたのである。

II (d) 1880年1月末ペテルブルクに到着したトゥルゲーネフは、さっそく31日付の手紙でポーリースにうまく宿舎が見つかったこと、『ヨーロッパ通報』の編集者スタシュレーヴィチ教授の家で正餐を共にしたこと等々と並べて女優「サーヴィナ嬢に会いに行った」ことを淡々と述べている。数日前「彼女は倒れて危く肩の骨を折るところだった。作品の一つを演じてくれた作家として、彼女には大層負い目がある。何人かの見舞客に取り巻かれて彼女はベッドについていた。愛らしかったが悲しそうだった。石膏のギブスをはめられて2週間は身体を動かすことはできない」¹⁴³⁾。サーヴィナの回復後、作家は2月19日アレクサンドル二世の即位25周年記念日の祝賀の盛大さ、農民解放委員会開催の晩餐会に招かれたことを知らせた同日付の手紙の中で、その前日の晩オストロフスキーの『野育ちの女』を演ずる「サーヴィナ嬢を観るために劇場に行った」ことを伝えている。「サーヴィナは豊かな才能を示した。始めから終わりまで真の偉大さをもって一人の野育ちの女性を描き出した(創り出した)。きっとあなたにも気に入ること受け合います。周りの全くつまらない役者たちの中で彼女だけが本気の話に値します。彼女には生氣と活力があります。彼女のアキレスの踵はその声で、単調ないやな声で、ありふれた音声です」¹⁴⁴⁾。トゥルゲーネフは1週間後の25日にもまた小デューマの『椿姫』の役を演じたサーヴィナを観て、2月26日付の手紙で、彼女が「才能と生氣に溢れ——『別離の』シーンはきっとあなたにも気に入るだろうこと——脚本は色褪せており——他の俳優は下手くそだったこと」をポーリースに伝えている。しかし、これもルーヴィンシュタインのシュールト、ショパンの演奏やエルミタージュ見物等と並べたペテルブルク近況報告のようなもので、

141) Тургенев, *Письма*, XII, 135.

142) Cf. Magarshack, *op. cit.*, p. 292.

143) Tourguénev, *N. C. I.*, t. I., pp. 229-230. Cf. Schapiro, *op. cit.*, p. 297.

144) I. Tourguénev, *Lettres inédites à Pauline Viardot et à sa famille*, p. 220. (以下 *L. I.* と略記する)。Cf. Schapiro, *op. cit.*, p. 297.

ポーリーヌの「愛らしき両手にキスを送ります」で結ばれている¹⁴⁵⁾。つづく2月29日付の手紙でもまたトゥルゲーネフは、年甲斐もなく謝肉祭のブリヌィを食べ過ぎて「胃の具合が悪いのに午前劇場に行ってサーヴィナ嬢を観た」ことに言及し、ここでも「彼女は実に見事に演じ、野卑で誘惑的なこと——これが彼女にぴったりで、議論の余地なく不思議なほどの才能の持主で——パリ公演ができたらきっとパリ中をさわがせることであろうね」¹⁴⁶⁾と書き送っている。しかしトゥルゲーネフはこんな時ポーリーヌと一緒に見られないのは残念だという、やさしいひと言を付け加えることを忘れていない。

以上のようにこの頃のポーリーヌ・ヴィアルドーあてのトゥルゲーネフの書簡を見ると、前述のようにその前年の秋サーヴィナに対してすでに「半ば父親のような、半ばそれ以外のやさしい感情」を抱いたと言い、1月末帰国早々サーヴィナを訪れ、3月末には金のブレスレットを贈りさえしている作家の手紙としては、かなり表現が抑えられているように思われる。しかしそれにもかかわらず、劇中人物をただ真似て表わすだけではなく、配役を生きることによってその人物に成りきり、いわば「創造」する女優としてのサーヴィナの天分豊かな表現力に引き込まれ、「野卑で誘惑的な」個性的女優という表現によって、かえってまさに作家自身が彼女に魅了されていることが漏らされている。事実、ポーリーヌもトゥルゲーネフに「友情ある非難」のことばを書き送ったものと推定される。というのは、4月7日付のポーリーヌあての手紙でトゥルゲーネフ自身次のように書いているからである。「いろいろ吉報を知らせて下さった長いお手紙落手しました。何か友情ある非難で始められていますが、それには当らないように思います。これについて言訳を申し上げようとも思いましたが、結局、あれこれ申し開きしない方がよろしいでしょう……」¹⁴⁷⁾。そして作家はブージュヴァルにいる時が自分にとって一番幸福な時だとお世辞をつけ加える。

他方、ポーリーヌあてと平行してトゥルゲーネフはクロードィーあてにも何通かの手紙を書いている。

I (d) まず1879年3月8日盛大な歓迎を受けたモスクワからベテルブルクに帰った翌9日付の手紙で、モスクワではレストラン「エルミタージュ」で百人もの大晩餐会が催され、大学生の古い歌でお開きになったこと、その日9日は午後9時から文学基金助成のための朗読の予定があることを知らせている。その朗読は「マリヤ・サーヴィナという名前のとても可愛らしい女優と一緒にやるはずで——今度彼女の写真をもって行って上げよう、……」¹⁴⁸⁾等々と書き送っている。作家からのこの手紙に対する返信と思われるクロードィーの手紙には、トゥルゲーネフがロシアで歓迎されたことはよいことだとしながらも、「やがてパリに戻った時の『郷愁』の種にならねばいいが」という心配が見られ、「私たちをお捨てになってしまうのではないかしら。まわりの人たちからの熱烈な歓迎がないこのパリでは退屈なさることでしょう……お戻りになるまでは心配ですわ」¹⁴⁹⁾と書かれて

145) Tourguénev, *N. C. I.*, t. I, p. 233.

146) Tourguénev, *L. I.*, p. 222.

147) Tourguénev, *N. C. I.*, t. I, p. 240. Cf. Schapiro, *op. cit.*, p. 297.

148) Tourguénev, *L. I.*, p. 279.

149) *Ibid.*, p. 328.

いる。

II (d) 翌1880年のクロードーあての手紙には、サーヴィナに言及したものが1通も残されていない。

III (d) ところが1881年サーヴィナのスパースコエ滞在の前後になると、クロードーあて書簡中のサーヴィナへの言及の口調は一転して変わった調子を帯びてくる。サーヴィナのスパースコエ来訪をあれほど小おどりして喜んでいたはずのトゥルゲーネフが、クロードーあての手紙の中では、別人のように、サーヴィナを悪しざまにけなすようになる。前節までに述べたように、1881年には帰国前の3月にすでにサーヴィナのスパースコエ滞在の約束が成立し、4月末ペテルブルクに到着し、5月末にはポロンスキー一家とサーヴィナを伴って一緒にスパースコエに発つ計画さえ考えられていた¹⁵⁰⁾作家にとって、まさに愛のドラマが一つの山を迎える直前であった。その5月22日付のクロードーあてのモスクワからの手紙に、意外にも、次のことばが見いだされるのである。「意地悪の君はサーヴィナ嬢のことをとやかく言っているね。彼女はちょっとの間姿を見せたがまた立ち去ってしまった。彼女に対する私の温度計は『冷淡』以下に下がってしまった。彼女の魚のような口、ありきたりの下品な鼻、下卑た声は、美しく生き生きしているがやさしくない彼女の眼のことまで忘れさせる。『彼女のことは忘れてしまったし、やがて消えてしまった』……」¹⁵¹⁾。次いで、ポロンスキー一家とスパースコエで6月を迎えたトゥルゲーネフは、同月25日付クロードーあての手紙で草刈りの季節のすばらしい環境の中で、ポロンスキーが写生をし自分は『勝ち誇れる愛の歌』に手を入れて書き終えたことを伝え、サーヴィナのこと言及している。「サーヴィナ嬢はスパースコエを訪れに来はしませんでしたし、また来ることもないでしょう。彼女は数週間の契約を結んでいるペテルブルクに帰っているのです。魚が水のそとでは生きられないように、彼女は舞台なしには生きられないのです。そればかりか彼女には、何と言ったらいいか、つまり復讐心があるのです。というのは、モスクワの観客がつまりは冷淡さを示したのに対して、彼女はペテルブルクの観客は絶対大丈夫だと信じているのです。彼女に裏切られても私は平気で諦められます。彼女には独創的で生き生きしたところがあるので会話（交際というべきか）は面白いのですが、舞台が彼女を骨の髄まで駄目にしてしまっていますし、それよりも何よりも彼女がいれば仕事の邪魔になるでしょうし、無駄にできるような時間は私にはないのです」¹⁵²⁾。これはサーヴィナのスパースコエ滞在をあれほど待ち焦がれていた同じ人の手紙とは思われないものである。次いでその「スパースコエ滞在」の1週間前に当たる7月6日付クロードーあての手紙にも相変わらず「私の思いは言うまでもなくブージヴァルの『とねりこ荘』にあります」と言い、「君のもう一つの質問、君が本当に好きか、という質問に対しては答える必要がありません。君が私のものであり、私が君を大好きなことは君も十分承知のことですから」と述べ、サーヴィナに言及して次のように書いている。「サーヴィナ嬢のことを君はご親切にも、おまけにちょっぴり私をいじめるためにだしに付かっているけれど——彼女はやって来ないことはほぼ確実なんだよ。それにたとえやって来たとして

150) 1881年5月26日付トポロフあて手紙。Тургенев, *Письма*, XIII/1, стр. 91.

151) Tourguénev, *N. C. I.*, t. I, p. 301. Cf. Schapiro, *op. cit.*, p. 297.

152) *Ibid.*, p. 304. Cf. Schapiro, *op. cit.*, p. 297-8.

も——君にした約束を守ることは大した手柄とはいえないでしょうよ。小さな藁の火はもうずっと前に消えてしまっているのだから。道化の要素はもう道化だということがわかり過ぎる位はっきりしてしまった。彼女はただ舞台の上で舞台によって舞台のために生きている、そんな女性なのだよ」¹⁵³⁾。実際にはサーヴィナのスペースコエ滞在のドラマが実現したこと、それがトゥルゲーネフにとって現実にとどのようなものであったかについては前に述べた通りである。7月18日サーヴィナが去ったのち約1週間後同月24日付のクロードイーあての手紙でトゥルゲーネフは、陰うつな気持を伝え次のように書き記している。「サーヴィナ嬢の訪問のことについて書いたお母さんあての手紙を見せてもらったらいいね。サーヴィナは私に打ち明け話をし、私たちは風変わりな面白い会話をしました。彼女は急に愛し始めました——（もちろん私をではありませんよ）——心の底から、初めて生きることを愛し始めたのです。そして私にそのすべてを物語ってくれました。——とても生き生きと、またそのまま書けばとても文学的になるような仕方です。恐らく君が想像するような別のことを期待することもできたのだけど、そんなことは全くなかったよ——しかもそれ以上の楽しみはなかったでしょうよ。考えてもごらん。初めて人生を愛する情熱を知ったのに彼女は世間体とかその他の心理的、社会的な理由のために舞台を諦めることを強制されて、結婚のことしか考えていない名義上の愛人 N. W. 氏に伴ってやむなくペルム（シベリアの辺境の）に行かなければならないのです。……考えてもごらん。こんなごたごたを。『とねりこ荘』に帰ったら事の仔細を詳しく話してあげよう。しかし君にした約束のことは考えるまでもないことだったんだよ」¹⁵⁴⁾。

現在までに知られている、ポーリーヌ及びクロードイーあてのサーヴィナ関係『未刊行書簡』は、ほぼ以上に尽きる。書簡中に言及されているポーリーヌやクロードイーからトゥルゲーネフあてに送られた書簡は、現在まだその殆どが知られていない。従って、親密な関係の交錯において避け難く生じる微妙な事情について判断を下すことはなお早過ぎるであろう。しかしそれにしても、サーヴィナとの愛を待ち焦がれるとともにクロードイーへの変らぬ愛を誓うトゥルゲーネフ、故郷スペースコエの安らぎのうちでブージヴァルへの郷愁に悩むトゥルゲーネフには明らかに人格の二重性、愛の感情の分裂が認められる。さきにコーニの評した老作家のためらう愛のやさしさ、チュッチェフの歌う「最後の愛」の希望なき至福とはこのような分裂、二重性を統一的に表わそうとした表現であるかに思える。

* * *

以上、本稿では「トゥルゲーネフの最後の愛」というテーマに直接関連のある範囲に極力限定して述べてきた。このことは、当然、作家トゥルゲーネフその人の創作活動、他の文学者との交わり等をはじめ同時代の政治・社会的な事件や思想運動とのつながりを捨象しているとの非難を免れないであろう。事実、ヤルモリンスキーが作家の「不死鳥の愛」を

153) Tourguénev, *L. I.*, p. 281. Cf. Schapiro, *op. cit.*, p. 298.

154) *Ibid.*, pp. 283-284; Cf. Schapiro, *op. cit.*, p. 298. プリチェットはサーヴィナのスペースコエ滞在をポーリーヌとクロードイーは知らされなかったといっているがそれは言い過ぎの誤りであった。Pritchett, *op. cit.*, p. 235.

きれいに取り出したのに対して、マガルジャックはその「愛」を仏・露両国にわたって創作し活動した作家の「ブージヴァル時代」の中に位置づけている。サーヴィナとの出会いと正に時を同じくしてトゥルゲーネフが母国ロシアの知識人各層に広く迎えられた状況を初めとして最後の中篇『クララ・ミリッチ』の創作過程に至るまで、作家の「最後の愛」との関連で説明されるべきことは数多い。本稿はそれら全体的解明の一環をなすに過ぎないであろう。しかし、総じて宗教的なロシアにおいて人間的な愛の内奥に救済を求めるかに見える無宗教のペシミスト、トゥルゲーネフの場合には、それはただならぬ一環であると筆者は信じている。

Последняя любовь Тургенева

Кадзуко Идэ

Настоящая статья посвящена последней любви Тургенева на закате его жизни к М. Г. Савиной, молодой актрисе Александринского театра.

Автор критически пересматривает несколько биографических исследований о Тургеневе, существовавших до сих пор, и вместе с тем пытается пополнить их новыми материалами, опубликованными в последние годы.

История отношений между Тургеневым, проживавшим в Париже и Савиной, занимавшейся театральной деятельностью, начинается их встречей в Петербурге в марте 1879 г. Потом они совершают вместе “поездку” от Мценска до Орла в мае 1880 г. История кончается пребыванием Савиной в Спасском, имении Тургенева, в июле 1881 г.

Первоисточники, относящиеся к этой теме следующие. — *Тургенев и Савина*, с предисловием и под ред. почетного Академика А. Ф. Кони, при ближайшем сотрудничестве А. Е. Молчанова, Петроград, 1918. Здесь были впервые опубликованы 79 писем (в том числе и телеграммы) Тургенева к Савиной за 1879–1883 гг. Вошли в сборник и неоконченные воспоминания Савиной о Тургеневе, и записи воспоминаний Савиной, сделанные Ю. Д. Беляевым, Д. В. Философовым, Вл. А. Рышковым, и еще выдержки из писем Савиной к разным лицам, касающиеся Тургенева, и т. д. Но письма Савиной к Тургеневу неизвестны до сих пор.

Тексты писем в сб. *Тургенев и Савина* были подготовлены очень тщательно, в большинстве своем они адекватны подлинникам. Но несколько писем было опубликовано с купюрами и некоторой правкой текста Тургенева. Начиная со 2-й книги XII тома писем *Полного собрания сочинений и писем И. С. Тургенева*, (1967–68) письма Тургенева к Савиной печатаются по подлинникам. Автор отмечает места купюр и правки.

О жизни Тургенева в 1879 г. Д. Магаршак отметил в своей книге, что Тургенев

уехал в Париж как будто перерожденным своей любовью к Савиной. По мнению автора настоящей статьи, это зависит от того, что Тургенев, приезжавший на родину, был встречен выражениями общей восторженной любви русской публики, т. е. ученых, интеллигенции, студентов и женщин.

О “поездке” от Мценска до Орла 1880 г. Б. Зайцев в своей книге писал, что “может быть, забавлялась она [Савина], играла с ним [Тургеневым] в те полтора часа между Мценском и Орлом, но ее собственная душа полна была другими”. Автору настоящей статьи думается, что это произвольная фикция Зайцева.

И еще кажется, что “пересмотр” поцелуев в биографическом исследовании Л. Шапиро, опубликованном недавно, происходит с пошлой и вульгарной точки зрения, и поэтому неубедителен. Предостережение А. Ф. Кони по этому вопросу остаётся в силе.

В настоящей статье автор отмечает отношения Савиной к Тургеневу при его смерти и после смерти, так как считает их значительными.

Исследуется так же влияние “последней любви” на отношения Тургенева к Полине Виардо, которую он любил всю жизнь, и так же к ее дочери Клоди, пользуясь новыми материалами *Nouvelle correspondance inédite, Lettres inédites à Pauline Viardot et à sa famille*, опубликованными в последние годы.

Автор признает двойственность личности Тургенева, и его “раздвоенное чувство любви”, но думает, что еще рано выводить заключение по этому вопросу из-за неизученности писем Полины и Клоди к Тургеневу.

В настоящей статье автор нарочно ограничивает изложение биографических фактов, касающихся прямо “последней любви” Тургенева, и не касается политико-социальных событий, литературной и умственной деятельности и общения с литераторами в тот же период.

По мнению автора, в “последней любви” символически отражается мысль Тургенева, неверующего и пессимиста. Но его мысль до конца искала спасения человека во внутренней глубине человеческой любви.